

加藤清正の実像

慶長16年(1611)の清正死去後、息子・忠広ただひろが清正の跡を継いで肥後を治めますが、寛永9年(1632)に改易され、代わって豊前小倉より細川忠利ただとしが入国します。

これにより加藤家は歴史の表舞台から姿を消すこととなりますが、それは清正第2の人生の始まりでもありました。

〈24〉清正公信仰 一神になった清正一

天下人と言われる豊臣秀吉や徳川家康が、死後神格化されて人々の信仰の対象となったことはよく知られています。前者は豊国大明神とよくに たいみやうじんとして、後者は東照大権現とうしょうたい こんげんとして江戸時代から現在まで人々の信仰を集めています。江戸時代には、藩祖はんそや功績のあった藩主を死後顕彰して、家臣たちに崇拜すうはいさせることは一般的におこなわれていました。しかし、天下人でもない、一地域の大名に過ぎない清正を神格化して信仰する、いわゆる「清正公信仰」が日本中に広がったことは、非常に稀な歴史的事象だと言えます。

清正公信仰は、いつごろどのようにして始まり、いかにして広がっていったのでしょうか。まず、清正死後50年ほど経った頃に代表的伝記である「清正記」と「続撰清正記」が成立しています。史実とかけ離れた部分も少なくありませんが、この2つの伝記で描かれている清正像が、今なお私たちが抱く清正イメージの原型となっています。死後50年という時間の経過を考えると、生前の清正を知る人が次第に減りつつあった時期で、清正の事績や記憶というものが忘れ去られてしまう危惧が関係者にはあったのではないのでしょうか。そのため、死後しばらくして近親者や家臣たちの中で、清正を供養するとともに、藩祖・清正の業績を顕彰する動きが始まります。それが次第に神格化へと発展し、これが清正公信仰の萌芽ほうがになったと思われます。加藤家の跡を引き継いだ細川家も清正の功績を称え、菩提寺である本妙寺ほんみょうじを庇護ひごしています。通常、新たな領主は前政権や前代の為政者を否定することから政治をスタートさせますが、細川家の場合はその逆です。加藤家に対しては、江戸時代を通じて敬意を払い続け、寛大な姿勢を見せています。このことも、熊本に清正公信仰が根付いた大きな下地になったと思われます。

清正公信仰が隆盛を見せ始めるのは、江戸時代後半からです。享保元年(1716)に清正のひ孫にあたる徳川吉宗が第8代将軍となり、同16年には、前述した「清正記」を閲覧しています。このことが改易された加藤家の名誉回復につながり、その後、世間では清正を扱った芝居が続々と登場して、その波乱に満ちた人生に江戸や大坂の庶民たちが酔いしれます。一方、清正公信仰の一大拠

点となった熊本の本妙寺では、宝暦10年(1760)におこなわれた清正150回忌法要を境に盛り上がりを見せ始め、文化7年(1810)の200回忌法要では、本妙寺周辺だけでなく、熊本城下一帯は全国からの参詣人やひと儲けしようとする商売人で溢れ返り、空前絶後の賑わいを見せます。ここにきて清正公信仰の熱狂は最高潮に達します。人々は、商売繁盛や病除け、果ては芸事の上達まで様々な願いを神様・清正に託しました。幕末には、時代を反映するかのよう、武運長久や攘夷成就などの祈願も加わり、力強い武者姿の清正を題材とした浮世絵も多く製作されました。

明治時代になると富国強兵のスローガンのもと政府が推し進める大陸進出のシンボルとして、朝鮮出兵で活躍した清正が再びクローズアップされます。軍国主義が色濃くなる明治時代後半から昭和にかけては軍神として兵士や民衆の信仰を集めます。この時代の小学校の国定教科書や唱歌にも「忠君愛国」の理想的な人物像として清正が取り上げられ、戦争へと突き進む国家の教育政策に利用されることとなります。

清正公信仰は当時の社会状況と密接に関連しており、社会の変化やニーズに応じて、その信仰形態や清正像も大きく変容しています。特に江戸時代と明治時代以降では、その性格が大きく異なります。清正公信仰の変遷たどを辿れば、その時々の変化が写し鏡のように見えてきます。言い換えれば清正公信仰の歴史は、日本社会の歴史そのものとも言えます。現在の清正像は、ある日突然出来上がったものではなく、変容しながらも長い歴史の中で人々によって形成されてきたものであり、これからも変化し続けていくことでしょう。

2年間全24回にわたる連載も今回で終了します。

タイトルにもあるように、本連載では伝説的英雄・清正ではなく、可能な限り当時の史料に基づいて清正の実像を描こうと心がけました。清正さんから「まだまだ実像には迫っとらん」とお叱りの声が聞こえてきそうですが、これまでとは少し違った人間・清正を提示できたのではないかと思います。本連載が、より魅力的で新たな清正像を、これから市民の皆さんで作り上げていく1つのきっかけになれば幸いです。

2年間お読みいただき、ありがとうございました。

このコーナーは、大隈 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

